

環境監査と環境マネジメントの統合に向けての研究
—スーパーISOとホリスティック・マネジメントを視座として— (2)

Holistic Study of Environmental Audit and Environmental Management (2)

石 井 薫
(Kaoru Ishii)

環境監査と環境マネジメントの統合に向けての研究 —スーパーISO とホリスティック・マネジメントを視座として— (2)

石 井 薫

はじめに —分離から統合への変革の時代—

- 1 環境監査・公共監査・環境マネジメントからホリスティック・マネジメントへの進化
- 2 環境監査と環境マネジメントの研究における国際的動向 (以上73号)
- 3 ホリスティック・マネジメントに向けての統合の哲学—ラズロとウィルバー—
- 4 環境監査と環境マネジメントを媒介するスーパーISO
- 5 人類版スーパーISO の実践指針 (統合指針)

結びに —ホリスティック・マネジメントによる統合— (以上本号)

3 ホリスティック・マネジメントに向けての統合の哲学—ラズロとウィルバー—

(1) アーヴィン・ラズロ『生ける宇宙—科学による万物の一貫性の発見—』

アーヴィン・ラズロの著作に関しては、拙著『環境マネジメント』(石井、2003)で、科学の限界域として、『創造する真空(コスモス)』(ラズロ、1999)を紹介した。また、「科学と秘学の統合Ⅱ」として、『叡智の海・宇宙』(ラズロ、2005)をとりあげた(石井、2005f)。ラズロの『生ける宇宙』(ラズロ、2008)は、それらの議論を更に展開したものである(なお以下のラズロの引用は、本書のページ数である)。

ラズロは、「A(アカシック)・フィールドは、生物圏においては生命体と精神を結びつけ、宇宙全体においては素粒子、恒星、銀河を結びつける。これによって、進化のある段階から次の段階へと手探りでやみくもに進む機械のような宇宙は、自らが作り出した情報を足場として向上する、一つの包括的システムとしての宇宙へと変貌する」と述べた後、

「宇宙は、機械というよりもむしろ生きた生命体に似ている。それは、過去から現在までの進化を基盤とし、その上に立って、現在から未来へと進化する。その論理は、生命の論理にほかならない。つまり、相互結合性と相互作用を通して、一貫性と全一性へ向かって進化するのである」と述べ、「魅力を取り戻した宇宙」という見方を提示している(ラズロ、54～55ページ)。

ラズロは、この数年間で、わたしたちが住んでいる宇宙は、存在する唯一の宇宙ではないとする、いくつかの「宇宙シナリオ」が構築されているとして、「これらの理論は、ビッグバンで生まれたのではなく、また、最後の銀河規模のブラックホールが崩壊してわたしたちの宇宙が消滅するときに

も終焉を遂げない“メタ-宇宙”すなわち“メタヴァース”が存在すると主張する。メタヴァースは、わたしたちの宇宙が生まれる前から存在し、わたしたちの宇宙が形を保てる段階を終了したあとも存在しつづける」(ラズロ、60ページ)と述べている。

さらに、ラズロは、「メタヴァースのなかで起こる生物進化は、学習曲線を伴う循環プロセスである。それぞれの宇宙は、生命のない状態から始まり、いくつかの惑星が生命を維持できる状態になると生命を誕生させ、惑星の条件が生命維持可能な段階を終えると生物を絶滅させる。しかし、量子真空はすべての宇宙によって共有されており、そこには、これまでに進化したすべての生命の痕跡が波の形で記録され保存されている。宇宙真空が生命の痕跡によってますます変調されるようになるにつれ、それは生命にとってますます好都合となる。そのおかげで、進化のプロセスが起こるところではどこでも進化が加速するようになるからだ」(ラズロ、77ページ)とも指摘している。

このような宇宙の見方は、スピリチュアルな次元で私と宇宙がつながっていることから、前世体験や死後の人格(死後交信)のような問題に一つの示唆を与える。すなわち「前世の経験については、実際に誰かが過去に生きていた別の人間の生まれ変わりとして誕生するというよりは、前世の体験をする人は、ほかの人の意識が真空に残したプログラムの痕跡にアクセスしている・・・。「他人の」プログラムを自分自身のプログラムと区別しないのであれば、わたしたちはその他人の意識を、自分自身の意識としてもう一度生きることになる。私たちがもう一度生きる特定の経験を元々行った人物は、ほかの場所に生きている場合もあれば、別の時代に生きていた場合もあろう。彼らの生涯の経験を保存しているプログラムは、空間全体に行きわたっており、しかも、時が経過しても薄れることはない。前世を経験する人は、その経験の当事者である他人のプログラムを自分自身のプログラムと区別することはできない。彼らの個人としての長期記憶は、いつのまにか超個人的な記憶に融合しているのである」(ラズロ、107ページ)とみることもできる。

トマス・エジソンは、「肉体が死んだあとも人格が存続するなら、その人格は、記憶、知性、そして、わたしたちがこの世で獲得するその他の能力や知識を保持すると考えることは、完全に論理的、もしくは科学的です。したがって、わたしたちが死と呼ぶものあとも人格が存在するのだとすれば、この世を去る人々が、この世に残した人々と交信したいと願うのは当然のことでしょう。わたしたちの人格は、肉体が死んだあとも物事に影響を及ぼすことができると、わたしは信じたい」として、死後交信できる装置を作ろうとしたといわれる(ラズロ、111ページ)。

ラズロは、死後交信などのメッセージの内容はさまざまだが、魂や霊は、それぞれがばらばらに存在するのではないという点については一致しているとして、次のように述べている。「つまるところ、“わたしたちは皆一つ”なのだ。それらのメッセージはまた過去に起こったすべての出来事と、未来に起こるのであろう、あるいは、起こる可能性のあるすべての事柄を保存している、アカシック・

レコードという古人の洞察に対応する、エネルギーもしくは意識の帯が地球を取り巻いている確たる証拠でもある」(ラズロ、112ページ)。このような見解に対しては、死後に、同じ個人の人格が存続するのか、そうではなくて、宇宙の情報場を通じて、その個人の情報を他の個人が入手するのか、種々の見方がでてこよう。

それはさておき、ラズロは物理的リアリティだけでなく精神的リアリティも人間の経験とみて、「主流の科学は反論するだろうが、リアリティの精神的側面もしくは次元を研究することもまた科学の範疇のなかに含まれる。なぜなら、リアリティの物理的次元とまったく同様に、リアリティの精神的次元も人間の経験による証言に基づいているからだ」(ラズロ、132ページ)と述べ、科学とスピリチュアリティの統合を試みようとしている。

上記の『生ける宇宙』におけるラズロの見解に、各界の著名な識者たちが、同書のなかで以下のように支持や賞讃のメッセージを寄せている。スタンリー・クリップナーとブライアン・A・コンティは、「本書のメッセージは、人類の分断ではなく、人類の統一を宣言するもの」(ラズロ、144ページ)といい、クリスチャン・ド・クインシーは、ラズロの壮大なヴィジョンは科学とスピリチュアリティの橋渡しとして、「世界の偉大なスピリチュアリティの伝統が提供してきた洞察を正当化する、全包括的な科学的モデルを提案している」(ラズロ、173ページ)という。またスタニスラフ・グロフは、「ラズロは多数の科学分野を統合する概念的枠組を定式化したのみならず、自然科学の大部分を、トランスパーソナル心理学や、世界の偉大なスピリチュアルな伝統と、極めて明瞭に結びつける架け橋を構築することにも成功した」(ラズロ、220頁)と賞讃している。

ピーター・ラッセルは、「ラズロは“量子真空”や“ゼロ・ポイント・フィールド”と呼ばれている仮想エネルギー場が、インドの伝統的な教えがアーカーシャと呼んできた、宇宙の記憶が保存されている、存在するすべてのものの源に対応するという説を提案している。わたしは、彼の議論を一步先に進めて、この究極の源の本質は意識そのものであり、それ以上でも以下でもないという説を提唱したい」として、次のような突込んだ見方を提示している。「たいていの人は、精神的側面が存在するかどうかを疑うのだが、わたしはそれについて疑ったことはない。わたしは逆に、物質的側面というものは、いったい本当に存在するのだろうかと疑うようになったのである。・・・もしかしたら、本当に存在するものなど何もないのではないか？ “物”など何も存在しないのではないか？ 物質的側面など存在しないのではないか？ すべてのものには精神的側面しか存在しないのではないか？」(ラズロ、222、236ページ)。

ラッセルのラディカルな見方はさておいて、最後にオランダ王女のイレーネ・ファン・リップーピースターフェルトの次の指摘をとりあげておこう。「自分の内的本質をより深く受け入れれば、それだけ深く周囲と結びつくことができるようになる。どの生き物も、全体のためであると同時に、

それ自体の本質的な価値のために、そして、他者に尽くすために存在している。これはわたしたち人間にしても同じだ。・・・内的な癒しと地球の癒しは同時に起こるのだ。わたしたち人間は、自分が何をしているかを意識することができるので、人間の種としての役割には深い責任が伴う」、さらに「(あなたは) 周りに存在するさまざまな生命体のすべてに心を開かねばならない。わたしたちは孤立した存在ではない。そして万物の一体性——わたしたちを機械的システムの組み合わせ以上のものにし、意識を持たせ、強くしてくれる永続的な相互結合性——に心を開き、それを受け入れるかどうかはわたしたち次第である。すべての生き物のためにすべての生き物を救う方向に向かって、人類は考え方を変える必要があるということを理解すべきではないだろうか？ そしてそれは、理解可能なことではないだろうか？」(ラズロ、259、262ページ)。

(2) ケン・ウィルバー 『インテグラル・スピリチュアリティ』

ケン・ウィルバーの著作に関しては、拙著『環境マネジメント』(石井、2003)で、科学と超科学の相互浸透として、『科学と宗教の統合』(ウィルバー、2000)を紹介した。また、「科学と秘学の統合」として、ウィルバーの『統合心理学への道』(ウィルバー、2004)などをとりあげた(石井、2005e)。ウィルバーの『インテグラル・スピリチュアリティ』(ウィルバー、2008)は、それらの議論を更に展開したものである(なお以下のウィルバーの引用は、本書のページ数である)。

ウィルバーは、これまで外面と内面、個と集合を分類の両軸とした4象限モデルを提示していた。本書では、その4象限モデルを発展させた統合的な見方として、AQAL(全象限・全レベル、all quadrants all levels)という統合モデルを提示している。このAQALを導入的枠組みとして、さまざまな活動を組織したり理解したりしようとする場合に、それをIOS(統合作動システム、Integral Operating System)と呼んでいる。IOSは、ダンスからビジネス、心理学、政治、エコロジー、スピリチュアリティにいたる、あらゆる活動の指標(インデックス)を作るのに役立つという。そしてIOSを使えば、法律、詩、教育、医学、スピリチュアリティなどとの対話、あるいはその中のお互いの対話も可能となるという。このような統合的アプローチの目的は、自己・文化・自然のなかで身体・心・霊(スピリット)を高めることにあると述べている(ウィルバー、6、49、52、448ページ)。

本書で、ウィルバーは、統合的な方法論としての多元主義を主張している。その最も簡単なものは、4象限からはじめることで、その4象限は、個の内面と外面、集団の内面と外面の4つの次元をさすという。そして、4象限のホロンないし事象は、それぞれ内側、外側から見るできるので、8つの基本的な視点が生まれることになる。ウィルバーはこの8つの基本的視点を図式化し、この8つの視点の総計を統合的視点と呼んでいる。さらにこの8つの視点は、8つの根本的な方法論を表すとして、図式化して説明している(ウィルバー、53～59ページ)。

ウィルバーは、「スピリチュアル」という言葉は、①どのラインでもその最も高次のレベル、②別の一本のライン、③状態の至高体験、④特定の態度という4つの意味で、以下のように使われているという。

- ① 認知から感情、欲求、価値のどの発達ラインを取り上げても、人々はその低い段階をスピリチュアルとは考えず、高次のあるいは最高のレベルをスピリチュアルとみなす。
- ② 時に人々は、「スピリチュアル・インテリジェンス」のようなものについて、発達のどのラインの最高段階でも獲得可能であるばかりでなく、独自の発達論的ラインでもあり、成長のはじめの段階から始まるものであると言う。
- ③ スピリチュアリティを、宗教的な経験、精神的な経験、瞑想経験、至高体験とみなす用法もある。
- ④ 時には、スピリチュアルというのは、どの段階また状態にあっても特定の態度、姿勢をさす場合がある。

ここで、ウィルバーは、「4つ目は非常に良く使われる用語であるが、しかし、結局、最初の3つの用法に戻ってしまう。なぜなら、実際には、愛、知恵、慈悲にも段階があるからである。この事実は、愛と慈悲を求めるほとんどすべての“グリーン”の作家が見逃している」（ウィルバー、146～149ページ）と指摘している。ウィルバーは自己流の発達ラインの段階に愛をあてはめて考えているのかもしれないが、私には、「愛に段階がある」という発言には、違和感を覚えざるを得ない。それはさておき、以下では前述のラズロの万物の統合理論に対するウィルバーの批判を紹介しよう。

ウィルバーは、まずニコラス・ルーマンが「社会システムは、個体（個人）から構成されているのではなく、個人間のコミュニケーションから構成されている」と指摘したことを評価する。「生命の網（ウェブ）」の理論家たちは、どこでも「すべての個体は、大きな生命の網を作る糸（単位）である」としたが、ルーマンは、そうではなく、「生命の網」の中身は、個体ではなく、個体間のコミュニケーションであると指摘したという。つまり、通常言われている「生命の網」は存在しないし、社会（集団）のホロンは、細胞が個体を構成するようには構成されていないということである（ウィルバー、254ページ）。

上記の見方を踏まえて、ウィルバーは、「有機的個体としてのガイアは存在しない。・・・“ガイア”も“生命の網（ウェブ）”も存在しない。ジェームス・ラヴロックが、ガイア概念を提唱したとき、彼は、それは一つの科学的な仮説としていたことをほとんどの人は知らないままである。しかし、典型的にいわれる“ガイア”も、“生命の網”も古いパラダイムの神話である（皮肉なことに新しいパラダイムと呼ばれているが）」と、独自の鋭い見方で、エコロジカルな思想家たちを痛烈に

批判している (ウィルバー、255～256ページ)。

私にはウィルバーが「科学は他の価値領域を征服した。そして、奇妙な理由から (自分でもわからないうちに) 科学は啓蒙主義以後の知識人の宗教となったのである」(ウィルバー、279ページ)と批判していることには共感できる。しかし、ウィルバーは、前述のラズロの「万物の統合理論」にも、次のように激しい批判を浴びせている。

「ラズロの「万物の統合理論」は、ホログラムや量子真空というものと結びついている。それはいわゆる「新しいパラダイム」と呼ばれ、統合的なアプローチが人気を博しているゆえに「統合」という言葉も入っている。うんざりするが、還元論はどこまでも還元論である。私が少しいらいらするのは、それが「統合」と称しながらも、実際には、その還元論によって、多くの分野にダメージを与えているからである」(ウィルバー、418～419ページ)。

さらに「[アカシック・フィールドとは、万物を記録し、記憶する場 (アーカーシャ) のことである]。間主観性は、ラズロによって無視されているばかりか、ときに非常に間違った形で解釈された、微細な還元論にとらわれている (私が見る限り、ラズロがすべてを包含すると自慢するために、最悪の還元論となっている)。すでに見てきたように、あるレベルから実在 (リアリティ) を見るためには、意識をそのレベルまで変容させる一人称の指示がなければならない。それなしに単に統合的な実在 (リアリティ) はこうです、ということを実在的に記述することはできない。単なる三人称的な主張を連続させることは、微細な還元主義であり、独白的な併合主義なのである。このためラズロの世界は、完全に独白的なものであり、これを「万物の統合理論」と呼ぶのは、困惑以外のなにものでもない」と (ウィルバー、420～421ページ)。

私には、ラズロもウィルバーも、まさに人類を代表して、最先端の場で真剣に取り組んでいるように思われるが、ウィルバーの上記のような批判を目にすると、何か大切なものが欠けており、ウィルバーの哲学の延長では、人類は危機的状況を超えられないのではないかと感じざるを得ない。ラズロに対する前出のオランダ王女の発言は、愛溢れるメッセージとなっているように感じられたことと好対照である。人類が、今日の地球環境の危機的状況を超えするためには、最先端の科学的知識に頼るよりも、私たちが愛溢れる存在となって、愛溢れる知見や愛溢れる実践によって、愛のエネルギーを人類のコミュニティに充満させていくことが大切なのではないだろうか。

そこで私は、愛溢れる人類社会を実現するために、種々のスーパー-ISO に続いて、後述のように、「人類版スーパー-ISO の実践指針」を提示したのである。それは、社会を変えるためには個人が変わらなければならないという哲学に基づく、“私”の意識マネジメントの手法である。

4 環境監査と環境マネジメントを媒介するスーパーISO

学問分野の細分化が進むなかで、個々の分野を統合し、全体を見つめることが必要な時代になっているように思われる。伝統的に、分析と総合の相関するプロセスが、理論の形成に重要な認識があった。本小論では、見える外面的なレベルの総合だけでなく、ラズロやウィルバーが見るように、内面的なレベルも含めた統合を考察している。見える外面の世界と見えない内面の世界をすべて包み込む、ホリスティックな視点に立つことが肝要だからである。私たちは、ホリスティックな見方をとることにより、はじめて細分化された断片でなく、全体的な現実に向きあうことができよう。

ここでは学問分野を統合していく一つのケースとして、環境監査と環境マネジメントを取りあげている。両分野ともに、地球環境問題に関連して、近年生成発展した領域である。ISO14001の環境監査は、環境マネジメントに焦点をあてているので、環境監査と環境マネジメントの両分野が緊密に関わることは明らかである。にもかかわらず、これら二つの分野は、それぞれ別個に発展し、両者の相互関係は未だ明らかにされておらず、統合化の試みもなされていない。そこで、この両分野の統合化を探究することは、今後他の学問分野を統合していく際にも、一つの手がかりを与えることになろう。

環境監査と環境マネジメントの両分野を統合するには、両分野が依拠する共通の基盤まで掘り下げていかねばならない。先ず環境監査は、ISOの環境監査から、スーパーISOへと展開することにより、意識マネジメントのレベルに到達することができる。一方環境マネジメントは、見える環境のマネジメントだけでなく、見えない意識のマネジメントを含むことにより、ホリスティックなマネジメントへと展開できる。その際、環境浄化と意識浄化が密接不可離のように、環境マネジメントと意識マネジメントは、硬貨の裏表の関係にあるとの認識が重要である（石井、2003）。

現行の環境監査と環境マネジメントの両分野が、現実の実践で大きなチェンジ（変革）を成し遂げるためには、見えない深層レベルの意識マネジメントに立ち入る必要がある。環境監査や環境マネジメントの実践に関する私たちの経験が示唆するように、意識が変わらなければ、結局何も変わらないからである。そこで環境ISOの限界を超えて意識マネジメントに踏み込むための実践手法として、筆者はスーパーISOを提唱したのである。

このスーパーISOに関しては、これまで地方自治体版・企業版・学校版の各スーパーISO、家庭版・社会版・地球版・宇宙版の各スーパーISO、それに学生版・コミュニティ版の各スーパーISOとして、それぞれの実践指針を提示し、大学における受講生たちの実践結果を公表してきた（石井、2004, 2005abc, 2006ab；石井薫のHP；地球マネジメント学のHP参照）。それとともに、意識マネジメントに関して、スピリチュアル・マネジメントを内に含むホリスティック・マネジメントというコン

セプトを提示した (石井、2005d, 2008ab)。

そこで以下に、この地球環境の危機的状況すなわち人類の意識の危機を乗り越えるために、統合指針としての「人類版スーパーISOの実践指針」を提示しよう (石井、2008d)。これは環境監査と環境マネジメントの統合を含め、学問分野を統合していく際の統合指針として役立つであろう。

5 人類版スーパーISOの実践指針 (統合指針)

1 愛の宣言

(1) 愛溢れる“私”になることを宣言する

地球の住人としての“私”が、“愛溢れる存在”になるという宣言をする。他人を批判するのではなく、まず“私”が変わることを決心する。私や他人、それに地球の健康を保持するため、日々の生活で笑顔や微笑みを絶やさずに、感謝と分かちあいの気持ちを大切に、癒しと愛の実践を心がける。

2 見える世界のカベを超えて、見えない世界へ

(2) 科学のカベを超える —複雑系から神秘系へ—

科学はみえる世界を対象としているので、愛や心などみえない世界は対象外である。科学はみえる世界の現象に限定して発言できるのであって、みえない世界に関わる現象に対しては、守備範囲外で発言できない。たとえば電磁波や環境ホルモンなどの影響に関して、「科学的に危険とはいえない」といわれることがあるが、「科学的に危険でない」ともいえない。宇宙は複雑というよりも、人間が測りしれないほど神秘なので、私たちは複雑系を超えて神秘系の研究をめざす必要がある。

(3) 環境のカベを超える —環境マネジメントから意識マネジメントへ—

私たちがどんなに地球環境問題に取り組んでも、私たちの意識が変わらなければ限界がある。今日の危機は、地球環境の危機というより、私たち人類の意識の危機に他ならない。見える世界の環境 (社会環境、地球環境、宇宙環境) のカベを超えて、みえない意識の世界に踏み込み、環境マネジメントだけでなく意識マネジメントに取り組むことが大切である。そのためには外宇宙から内宇宙への視線の転換が必要である。

(4) 人間のカベを超える —みえる身体からスピリチュアルな存在へ—

人間は見える肉体だけでなく、見えない感情体や思考体、心や精神からつくられている。人間は肉体という衣服をまとったスピリチュアルな (霊的な) 存在とみられる。およそ100年位しかもたない肉体という衣服が見える世界で消滅しても、みえない世界で靈魂は不滅といわれる。まだ使える肉体という衣服を自分で脱ぎ捨てても靈魂までは消滅させられない。自殺は生きて学ぶプロセスを止めるだけなので、人生を生きぬく大切さを学びたい。

3 万物を統合するホリスティック・マネジメントへ

(5) 医療・教育・経営等の実践を統合するホリスティック・マネジメントへ

人間は“スピリチュアルな（霊的な）存在”とみることが、すべての出発点となる。人間は見える身体を見えない身体が包んでいるスピリチュアルな存在だからこそ、スピリチュアルな癒しやスピリチュアルな教育が必要となる。見える身体と見えない身体は相互に影響しあうので、見える身体だけでなく、見えない身体も視野に入れて癒すことが大切となる。ホリスティック医療やホリスティック教育の他、ホリスティック経営など、スピリチュアルな次元を視野に入れたホリスティックな分野を拡げるとともに、それらホリスティックな諸分野を統合する広義のホリスティック・マネジメントをめざしたい。

(6) 科学・哲学・秘学等の知を統合するホリスティック・マネジメントへ

地球環境の危機を脱出するために、見える世界のマネジメントだけでなく見えないスピリチュアルな世界を含んだホリスティック・マネジメントが必要となる。しかし、科学万能主義もしくは科学至上主義が宗教的教条と化して、私たちの価値観や思考の自由を束縛している。科学の対象は見える世界だけなので、みえない世界を対象とする哲学や秘学等にも眼を向けたい。見える世界と見えない世界の知を統合するホリスティック・マネジメントによって、科学・哲学と秘学に橋を架けることが人類の課題になっている。

(7) スピリチュアル・マネジメントを含むホリスティック・マネジメントへ

スピリチュアル・マネジメントは見えない意識の世界やスピリチュアルな（霊的な）存在としての人間に焦点をあてる。ホリスティック・マネジメントは、外面と内面を視野に入れ、見える世界を内に含む見えない世界全体の場を重視する。そして霊的存在としての人間の癒しとその周囲の全体場の癒しの相互影響に眼を向ける。個人の癒しのために、いい全体場をつくることが大切で、見える世界の人間を癒すために、見えない世界を浄化する必要がある。それとともに今日のいじめや心の闇からもたらされる異常な事件の背景にある“心の砂漠化”に眼を向け、私たち一人ひとりの心に愛を育てることが大切である。

4 時空を超えて、意識の世界から愛の世界へ

(8) “神”と向きあい、神と私の一体から万物一体へ

宗教的な神ではなく、私や万物と一体としての神に向きあう。神は愛や自由や生命など万物を統合したもので、私たちは、神の一面を愛や自由や生命と名づけているにすぎない。神は私や万物そのものであるので、神と向きあうことは、自分自身と向きあうことに他ならない。私たちは、モノや人やお金、それに組織や記号などの万有権力の支配から自由になることにより、孤立した私ではなく、愛溢れる世界で万物とつながった私へと変容できる。

(9) 人生と向きあい「生きるとは愛すること」を学ぶ

人生は気づきのプロセスで、人間はスピリチュアルな存在と気づくことが大切である。外面ばかり見るのではなく、内面への逆視線で自分を見つめるようにする。そして「生きるとは愛すること」で、人生は「生きるとは愛すること」を学ぶプロセスと知る。愛溢れる“私”に変わることで、愛溢れる社会、さらに愛溢れる地球へと変わっていく。それは、私から地球を変える哲学の実践といえる。

(10) 愛溢れる人類のコミュニティづくりを実践する

私たちは見えない世界での無尽蔵の愛のエネルギーを活用して、見える世界の様々の社会のシステムを愛溢れるものに変容できる。最低限生きていくのに必要な衣食住、それに教育と医療が与えられるように、互いに分かちあい、サポートしあう社会をめざしたい。そのためには「私ひとりが何をしてでも大して変わらないだろう」という意識から、「私が入類の代表」、さらに「私が入類全体」という意識に転換して、自分自身の周りから、愛溢れる人類のコミュニティづくりを実践する。

結びに ―ホリスティック・マネジメントによる統合―

前稿(1)の「はじめに」(石井、2009a)で、2008年米国大統領選でのバラク・オバマの勝利演説に言及して、チェンジ(変革)を唱えるなら、どんな現状から、どんな未来へのチェンジなのかを提示する必要があると指摘した。そして、「分離の時代から統合の時代への変革」を提言した。ここでは、人類が分離の時代から統合の時代に移行するには、3つのカベを乗り越える必要があることを指摘した。すなわち第1は、見える世界の環境のカベを超えて、見えない意識の世界をめざすこと、第2は、見える世界の科学のカベを超えて、見えない世界を取り扱う秘学の知見を視野に入れること、第3は、見える人間の体のカベを超えて、人間はスピリチュアルな存在だと知ることである。

そこで本稿(2)の「結びに」では、世界中が注目した、2009年1月20日のオバマ大統領就任演説からみてみよう。オバマ大統領は「科学を本来の姿に再建し、技術の驚異的な力を使って、医療の質を高め、コストを下げる。そして太陽や風、大地のエネルギーを利用し、車や工場の稼働に用いる。新しい時代の要請に応えるように学校や大学を変革する。これらすべては可能だ。そしてこれらすべてを、私たちは実行する」という。また、「私たちが今日問わなくてはならないことは、政府が大きすぎるか小さすぎるかではなく、それが機能するかどうかだ。まっとうな賃金の仕事や、支払い可能な医療・福祉、尊厳をもった隠退生活を各家庭がみつけられるよう政府が支援するのかどうかだ」とも述べた。そして「今私たちに求められているのは、新たな責任の時代だ」とするとともに、「地平線と神の恵みをしっかり見据えて、自由という偉大な贈り物を受け継ぎ、未来の世代

にそれを確実に引き継いだ、と語られるようにしよう」と訴えた（朝日新聞、2009年1月24日「オバマ大統領就任演説」）。

米国大統領選挙の演説で、オバマ大統領は“チェンジ”をキャッチフレーズにした。しかしその後の大統領就任演説では、責任（responsibility）と自由（freedom）がキーワードのように思われる。そしてこれからの地球と人類の行く末を見据えて、社会のあり方や人々のあり方について、心を一つに力を合わせて危機を乗り越えるための理念や哲学を語っている。オバマ大統領は貴重なメッセージを世界に伝えたが、それは実践に向けての理念や哲学を明示して、素晴らしいスタート地点に立ったということである。

今後、オバマ大統領の理念や哲学の実践が、どのように展開されるのか、希望の光を感じるものの、先行きは全く不透明である。たとえば「新しい時代の要請に応えるように学校や大学を変革する」などというも、一体どのように変革するのか、何もみえない。もし、オバマ大統領が、見える外面の世界だけで問題解決もしくは社会マネジメントを考えているのであれば、結局は、今日の危機を乗り越えることはできないだろう。今日の危機を人類が乗り越えられるかどうかは、人類が見える世界のカベを超えて、見えない世界に立ち入れるか、そして見える世界と見えない世界を統合したホリスティック・マネジメントが実践できるかどうかにかかっているからである（石井、2009b）。そこで以下では、人類が見える世界のカベを超えて、見えない世界に辿り着くための“哲学実践”について論じたい。

II

これ迄人類は、学問の諸分野も実践の諸分野も、外面にばかり目を向けていた。科学や哲学など知の分野も、医療や教育、それにマネジメントなどの実践の分野においても、外面に目を奪われていた。たとえばマネジメントの分野においては、人、モノ、カネ、情報などの外面的なマネジメントに焦点があてられている。マネジメントの分野に比べて、教育の分野では、近年ホリスティック教育の領域で内面に踏み込む努力が見られる（ミラー、1994）。一方医療の分野では、先進的なホリスティック医療の領域で、かなり内面に立ち入った議論が展開されている（シーリー&ミス、1995；ガーバー、2001）。

ただ今後は、医療、教育、それにマネジメントなど理論と実践のあらゆる分野で、全体として内面に焦点をあてた見方をしていくことが大切と思われる。つまり内面の変革によって、結果的に外面が変わっていくという見方や哲学で実践していくのである。

ここで“哲学”ではなく、“哲学実践”という新しいコンセプトを提示したい。私たちは長い知の歴史のなかで、理論と実践の区別のように、分離の思考を常識として強固にしてきた。しかし理論と実践を分離して考えるのではなく、理論と実践を統合して一体とみることが重要と思われる。こ

れは、感じたり、思考したり、実践したりすることが、別のことのように分離するのではなく、感じること、思考すること、実践することは、切り離せない同一の現象とみなすのである（このような見方は、クリシュナムルティ[2005、220～221ページ]に依拠している）。哲学に関しても、理論だけでなく理論と実践を統合した一つの現象とみるのである。そのような哲学の見方を“哲学実践”として、21世紀の新しい哲学の道標としたい。

20世紀の哲学は、言語論的転回という流れで、言語哲学が主流であった。そこでは哲学は言語や科学などの強い影響を受け、外面の分析が支配的であった。また地球環境問題もそれほど表面化していなかったこともあり、地球環境の危機的状況に応えるような哲学は、ほとんどみられなかった。唯一の例外は、スコリモフスキーで、『エコフィロソフィー21世紀文明哲学の創造—』（スコリモフスキー、1999）は、20世紀の哲学と21世紀の哲学の架橋となるものとして、高く評価される（石井、2003）。

そして21世紀の今、私たちは、外面レベルの理解と実践の統合のみならず、内面にも眼を向け、外面と内面を統合する時機にきている。ここで意識やスピリチュアルな領域の内面と外面を統合することこそ、まさに“ホリスティック・マネジメント”に他ならない。

医療や教育というのは、理論と実践が融合しやすい領域であり、また外面と内面の関わりが比較的理解されやすいところから、ホリスティック医療やホリスティック教育として展開されているように思われる。同様にマネジメントも理論と実践が統合しやすい素地があるので、今後内面に眼を向けることにより、ホリスティック経営、さらにホリスティック・マネジメントとして重要な役割を果たすコンセプトとなろう。すなわちマネジメントは、理論と実践の統合のみならず、ホリスティック・マネジメントとして、ホリスティック医療、ホリスティック教育、それにホリスティック経営など、あらゆる分野を外面と内面で統合することを可能とするコンセプトだからである。そしてそのようなホリスティック・マネジメントは、今日の統合の時代の理念かつ実践であり、内面にも関与する“哲学実践”そのものと見なされる。今日の人類の危機的状況を乗り越えるために、私たちが愛溢れるホリスティック・マネジメントを実践することは、愛溢れる哲学実践そのものであり、愛溢れる生き方をすることとも重なるのである。

III

私たちは、絶えず変化する多次元多様な世界に身を置いている。私たちは、自分の置かれた場から、世界の一部を刈り取って、それぞれの世界をつくっている。美しい自然、温かい人間関係、些細なトラブル、戦争や災害、病気やストレス、生活不安等々、種々様々の出来事によって、それぞれの世界が幻影のように繰り広げられる。私たちは、自分が置かれた場から、小さな視野で身の回りの外面をみて、あれこれ一喜一憂している。そして私たちは、時間の呪縛のなかで、安全な生活

をもとめて、モノやお金や知識を所有し蓄積する歴史を歩んできた。そして将来に希望の光を見い出せないまま、今日の人類の危機を迎えているのが実状である。

このような状況を見ると、科学や言語など分離を強化する思想の発展にばかり眼を向けた、これ迄のような人類の歩みの延長線上では、破局に至るのも自明のここのように思われる。私たちは同じ世界を生きながら、それぞれ外面の世界のごく一部だけをみているため、互いに異なった世界観をもち、それが分離した価値観をもたらし、さらに対立や争いを生んでいる。そこで、先ず私たちは、外面に向かうのではなく、内面をみるよう視線を転換したい。人々が内面をみることによって、それぞれの世界観は、内奥の深いところで一つのものに収斂していく可能性がある。私たちは眼の外の世界でなく、眼の内奥に向かうことにより、それぞれ万物は一つであるとの統合した世界観を共有する道が拓ける。つまり外面から内面への視線の転換によって、はじめて世界の分離から世界の統合へとチェンジ（変革）することができるのである。

IV

外面だけでなく、内面をみることは、自己の意識マネジメントの実践からスタートできよう。そのような意識マネジメントの具体的な手法として、前述のように私は各種のスーパーISO を考案した。家庭&社会版スーパーISO、地球&宇宙版スーパーISO、それに学生版&コミュニティ版スーパーISO などである。そして本稿では、環境監査と環境マネジメントの統合に向けての試金石として、今日の地球環境の危機的状況に人類が対応するために、「人類版スーパーISO」の実践を提案した。

人類版スーパーISO によって、私たちは愛溢れる存在として、外面と内面を統合して生きることが可能となる。それが、環境監査と環境マネジメントの統合を含む愛溢れるホリスティック・マネジメントに導き、私たちの社会のシステムを愛溢れるものにチェンジしていくであろう。環境監査と環境マネジメント等、諸学の統合の時代の哲学実践として、愛溢れるホリスティック・マネジメントと人類版スーパーISO が、私達人類の進路にとって、一つの道標となるのではないだろうか。

参考文献

- 石井薫 (2003) 『環境マネジメント—地球環境時代を生きる哲学—』 創成社。
- 石井薫 (2004) 『地球マネジメント入門 (第2版)』 創成社。
- 石井薫 (2005a) 『「環境マネジメント入門」講義の現場報告』、創成社。
- 石井薫 (2005b) 『「環境監査論」講義の現場報告』 創成社。
- 石井薫 (2005c) 『「環境マネジメント」講義の現場報告』、創成社。
- 石井薫 (2005d) 「環境マネジメントからホリスティック・マネジメントへの展開—社会マネジメント・環境マネジメント・意識マネジメント— (1)」『経営力創成研究』(東洋大学) 創刊号。
- 石井薫 (2005e) 「秘学に向きあう時 (1)」『地球マネジメント学会通信』第63号。

- 石井薫 (2005f) 「秘学に向きあう時 (2)」『地球マネジメント学会通信』第66号。
- 石井薫 (2006a) 『環境監査—自治体版・企業版・家庭版・学校版スーパーISO と自己宣言(第3版)』創成社。
- 石井薫 (2006b) 『公共監査論』創成社。
- 石井薫 (2008a) 「環境マネジメントからホリスティック・マネジメントへの展開—社会マネジメント・環境マネジメント・意識マネジメント— (2)」『経営力創成研究』(東洋大学) 第4号。
- 石井薫 (2008b) 「意識マネジメントとスピリチュアル・マネジメント—環境マネジメントからホリスティック・マネジメントへの架橋—」『経営論集』(東洋大学経営学部) 第71号。
- 石井薫 (2008c) 「スピリチュアル・マネジメントを内に含むホリスティック・マネジメントへの進化」『地球マネジメント学会通信』第79号。
- 石井薫 (2008d) 「今、“神と人生とどう向きあうか”を哲学する」『地球マネジメント学会通信』第81号。
- 石井薫 (2009a) 「環境監査と環境マネジメントの統合に向けての研究 —スーパーISO とホリスティック・マネジメントを視座として— (1)」『経営論集』(東洋大学経営学部) 第73号。
- 石井薫 (2009b) 「統合の時代の哲学実践」『地球マネジメント学会通信』第85号。
- ウィルバー、ケン (2000)、吉田豊訳『科学と宗教の統合』春秋社 (Ken Wilber, *The Marriage of Sense and Soul : Integrating Science and Religion*, 1998)。
- ウィルバー、ケン (2004)、松永太郎訳『統合心理学への道—‘知’の眼から‘観相’の眼へ』春秋社 (Ken Wilber, *The Eye Of Spirit—An Integral Vision For A World Gone Slightly Mad*, 1997)。
- ウィルバー、ケン (2008)、松永太郎訳『インテグラル・スピリチュアリティ』春秋社 (Ken Wilber, *Integral Spirituality*, 2006)。
- ガーバー、リチャード (2001)、上野圭一監訳・真鍋太史郎訳『バイブレーション・メディスン』日本教文社 (Richard Gerber, *Vibrational Medicine*, 1988)。
- クリシュナムルティ、ジドゥ (2005)、大野龍一訳『人生をどう生きますか?』コスモス・ライブラリー (Krishnamurti, Jiddu, *What Are You Doing With Your Life?*, 2001)。
- シーリー、ノーマン&ミス、キャロライン (1995)、石原佳代子訳『健康の創造』中央アート出版社 (Norman Shealy & Caroline Myss, *The Creation of Health*, 1988)。
- スコリモフスキー、ヘンリック (1999)、間瀬啓允・矢嶋直規訳『エコフィロソフィー—21世紀文明哲学の創造』法蔵館 (Henryk Skolimowski, *Living Philosophy*, 1992)。
- ミラー、ジョン P. (1994) 吉田敦彦・中川吉晴・手塚富恵訳、『ホリスティック教育—いのちのつながりを求めて—』春秋社 (John P. Miller, *The Holistic Curriculum*, 1988)。
- ラズロ、アーヴィン (1999)、野中浩一訳『創造する真空 (コスモス)』日本教文社 (Ervin Laszlo, *The Whispering Pond*, 1996)。
- ラズロ、アーヴィン (2005)、吉田三知世訳『叡知の海・宇宙』日本教文社 (Ervin Laszlo, *Science And The Akashic Field*, 2004)。
- ラズロ、アーヴィン (2008)、吉田三知世訳『生ける宇宙—科学による万物の一貫性の発見』日本教文社 (Ervin Laszlo, *Science And The Reenchantment Of The Cosmos*, 2006)。
- 地球マネジメント学会のHP <http://homepage3.nifty.com/earth-management/>
- 石井薫のHP <http://homepage3.nifty.com/ishii2004/>

(2010年1月5日受理)